絆の肖像

godlove

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆の肖像

【Ｎコード】

Ｎ０４４８Ｄ

【作者名】

ｇｏｄｌｏｖｅ

【あらすじ】

涙流し、壁にぶつかり、愛の形を知る。家族の愛情と、母の偉大さ、それに気づける話にしたいです。

宝者を想う人

お袋の涙を知ってる。
弟の悔しさも知ってる。
俺たちは、これからもずっと家族なんだ。

両親は俺が3歳の頃に離婚した。
秋も終わりかけた１１月の寒い日に家族の糸はぷっつり切れた。

寡黙で、釣りだけが趣味の親父。
酒は呑まず、仕事真面目で、休日は釣りに行く。

お袋は少し頑固で、心配性で、生まれたばかりの弟をいつも抱えてた。

弟を生んでお袋は腰を痛めた。
家事もろくにできず、親父は仕事から帰るとお袋や俺たちに食事を作った。
市営の安アパートで立派な家具なんてひとつも無い、慎ましい暮らし。
お袋にはそれだけで十分だったみたいだ。

親父は仕事に、家事に、弟の夜鳴きに、潤わない生活に疲れ果てた。

離婚は必然だったみたいだ、俺が覚えてるのはお袋が薄っぺらい布団で泣いてる姿だけ。
気がつけば親父はいなくなっていて。
相変わらずヒューヒューと鳴る隙間風と、ガタガタうるさい窓ガラスだけが安アパートに残った。

お袋は働き始めた。
生活保護は受けないというのが、お袋の意地だった。
「あんた達は母さんの宝者、絶対幸せにするからね」
これが27年間言い続けているお袋の口癖だ。

俺が保育園生になった頃、お袋の腰はだいぶ回復していた、回復していなかったとしても
俺達にはそう見えた。
お袋は、朝は新聞配達、それからスーパーで露天販売をした。
毎日疲れて帰ってくると、俺と弟のうっとおしいお喋りがお袋を待っていた。
保育園であった訳のわからない話だとか、弟がどんな悪さをしただとか。
お袋は、俺たちの話を聞きながら眠っていた。
俺はそれが少しだけ、本当にすこしだけ不満だった。
もっと聞いて欲しかった。

たまの休みにはお袋を叩き起こした。
飛行機して欲しかった。
ホットケーキ焼いて欲しかった。
どこかおもちゃがいっぱい飾ってあるところとかに連れて行って欲しかった。
何もしなくていいから、起きて一緒にいて欲しかった。
お袋は、そんな恨めしい俺たちを見ていつもニッコリ笑った。

「こんなうるさい宝者はないね。」

俺にはそれが文句に聞こえて、いつもふてくされた。

「布団に入りなさい」
そう言ってお袋がペラペラの掛け布団を捲くると、俺と弟は一目散に布団に飛び込んだ。

たまに親父が来た。
いつも、玄関で俺と弟を呼んだ。
黒ずんだ肌に刻まれたシワをクシャクシャにして笑って、いつも同じジャンパーを腕まくりして玄関に立っていた。
「身長何ｃｍになった？」「俺のことわかるか？」
いつもそれだけ言うと、言葉に詰まる親父
俺は精一杯親父を睨みつけた、弟は恥ずかしそうにモジモジする。
お袋は台所で黙って立っていた。
玄関の電球のオレンジ色の光が、親父と俺達兄弟にちょうどいい距離を作っていた。
親父が帰るときは、いつもコッソリ窓から親父が帰るのを見ていた。
知らないオバサンが乗った車に親父が乗り込む。
台所でお袋が「くそ」というのを何度も聞いた。

俺が小学生になった頃、弟の提案でお袋の新聞配達を手伝うことにした。
俺より2歳も年下でチビの生意気な弟が
「兄ちゃん、母ちゃんきつそうやし新聞配達手伝ってやろうや」
なんて言い出すから、なぜか悔しかった。
しかし、お袋は許さなかった。
だいたい、スクーターなのに3人では行けなかった。

俺は何が何でも手伝おうと決めた。
お袋が朝４時頃起きて、ゴソゴソと用意しているうちに弟とコッソリ外に出た。
俺がスクーターの足置きのところにチョコンと乗って、弟は後ろのカゴにスッポリ収まっていた。
でも、お袋はいつまで経っても出てこなかった。
どうやら毎日仕事に出る前に、俺たちの寝顔を見て出かけるのが習慣らしかった。
しばらくして、半狂乱で出てきたお袋は俺たちの滑稽な姿を見るなり泣き出した。
「カワイイカワイイ！私の宝者！大切な宝者！」
と、泣いた。
大きなお袋は、片手で弟をカゴから引き上げ、俺の首根っこを掴んで抱き上げた。
ギュゥっと二人を抱きしめてずっと泣いているもんだから、弟の顔はビショビショに濡れていた。
結局、手伝いは幻に消えたが俺も弟も満足だった。

母の思い

うだるような暑さも遠のき、紅葉が山を覆い、その上を雪が真っ白に染め上げた。

頬を真っ赤に紅潮させ、雪遊びに夢中な俺と弟は、きっとお袋が見たら雪に住む妖精のように見えただろう。

お袋は相変わらず働いていた、お袋の頭の中は俺と弟の分の将来の学費やらなんやらで一杯になっていた。

冬の寒さは、お袋の持病の腰痛に拍車をかけ、今年で３８になったお袋は実年齢以上に見えた。

毎日疲れて家に帰ると、俺と弟が家中をメチャメチャにしている、それを溜息とともに片付けながらも俺と弟の寝顔を見てお袋は（頑張ろう）と小さく呟いた。

小学校ではマウンテンバイクが流行っていた。

友達の誰かが、親に買ってもらったマウンテンバイクの話を自慢げに話していて、誰もが羨ましく思った。

そいつは学校が終わると、ピカピカの真っ赤なマウンテンバイクで走り回っていた。

歩道の段差を軽々と超えて見せたり、滑りそうな雪の上を格好良く走って見せた。

しばらくすると「俺も買ってもらった」とかいう話を聞くようになった。

マウンテンバイクを持っている奴等は（金持ちチーム）持っていない奴等は（貧乏チーム）となんともむごい称号を頂いた。

（貧乏チーム）のメンバーは本当に貧乏な家の子供達３人で構成されていた。

その数の少なさが小学生ながらにリアルに感じられて悲しかった。

（金持ちチーム）は学校が終わると、何枚も重なったビックリマンシールをポケットに入れてどこそこに集合して町中を冒険してまわり（金持ちの秘密基地）まで作り上げた。

学校にいけば小学生独特の無邪気さで「貧乏菌」「汚い」「くさい」と呼ばれた。
それがなんだかお袋が馬鹿にされているようで、帰り道に自然と涙が溢れてきた。

俺はお袋にありったけの思いを伝えた
「小遣いちょうだい」「ビックリマンシール買って」「マウンテンバイク買って」「洋服買って」「一軒家に引っ越したい」「ファミコン欲しい」「マジックテープの靴も欲しい」

欲しいものを涙ながらにねだった。
大人は簡単に買えるんだと思っていた。

実際お袋はそれなりの貯金をしていた、しかしそれはお袋なりに念密に計算した俺達の将来の必要経費だった、だから毎日の買い物は５００円以内と決めていたし、お袋が着ている洋服はすべて年代物や友人からの貰い物ばかりだった。

ここぞとばかりにおねだりに便乗した弟との大合唱をお袋は沈んだ笑顔で受け止めた。

「ごめんね、ごめんね」

そればかりお袋が連呼するから、弟は何故か泣き出し俺も何故か泣いてしまった。
買ってもらえない悲しさと、お袋の悲しい笑顔がそうさせた。

クリスマスの日（貧乏チーム）は俺一人になるようだった、他の２人はクリスマスに買ってもらうと言っていたし、俺はもうお袋にねだる勇気がなかった。

ちょうど冬休みで学校は休みだから、（貧乏コール）も（金持ちチーム）の話も聞かなくて済むのが幸いだった。

１２月２５日
お袋がいつも通り帰ってきた。
ハァハァ息を切らせて、いつもより大きな買い物袋を持って帰ってきた。
俺と、弟は玄関が開く音に敏感に反応して、お袋のもとへ駆け寄り大きな買い物袋に喜んだ。
「今日はご馳走！？」
「そうよ、一緒にクリスマスを祝おうね」
お袋がコッソリ冷蔵庫にケーキを隠したのも知っていたし、お袋が骨付きの鶏肉を焼く音に落ち着かなくなって、食卓と台所を行ったりきたりした。

ご馳走といっても、スーパーで特売だった骨付きの鶏肉が一羽づつと、ご飯と味噌汁という少し淋しいご馳走だったが、（特別）という響きに俺と弟は酔いしれた。

ケーキを食べて満腹になった俺と弟はすぐ寝てしまった。
と、いうよりサンタが早く来てくれるように早く寝た。おきたら枕元にプレゼントがあってそれはきっとビックリマンシールかファミコンのはずだった。

朝起きると、以外にも枕元には何もなくてお袋の字でサンタからの

置手紙がテーブルにおいてあった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
良い子のお兄ちゃんと弟君へ

プレゼントは外においてあるよ、お母さんは君たちが大好きだよ

お母さんが帰ってきたら鍵は渡すよ

サンタさんより

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

小さな体を跳ね上げて弟と一目散に外に出た。

ハンドルに真っ赤なリボンがついた。
真っ黒な同じマウンテンバイクが2台あった。
一台は補助輪が付いていて、弟のそれとすぐわかった。
「うわあ！！！やったぁ！」
「兄ちゃんマウンテンバイク！」

やったやった！と大喜びしながらマウンテンバイクを眺め回した。
ところどころサビついててピカピカではなかったが、それは正真正銘のマウンテンバイクで泥除けも、骨太のフレームもかっこよかった。
夕方頃、お袋が帰ってくると俺も弟も抱きついて離れなかった。

ありがとうありがとう！
母ちゃんありがとう！

嬉しくて嬉しくて、子供のボキャブラリーではありがとうしか言えなかった。
お袋は笑って、もう（貧乏チーム）じゃないねと言った。
「あんた達は私の宝者。宝者が泣いてるとお母さんは悲しくなるよ」とニッコリ笑った。

僕達が強くなる

お袋、俺と弟はまだまだ子供だった。
それでも、この小さな手でお袋を守りたかった。

〜〜〜〜〜〜〜

年明けの１月１日は、俺達兄弟が一年で一番金持ちになれる日だ。
小学４年生になった俺には５００円、３年の弟には４００円。
お袋は、５００円玉ではなく５０円や１０円を混ぜた重いお年玉袋をくれた。
５００円は、我が家の一日分の生活費に相当する大金だ。
俺も弟も、ポケットの中の小銭をジャラジャラと音を立てて喜んだ。
俺達のお年玉の使い道は決まっていた。
「お菓子買ってくる！」

外へ出ると一面銀世界が広がり
空から降りてくる雪の一つ一つが風に揺れながら俺達の方にゆっくり近づいてきた。
息を吸うたびに鼻が痛くなって、それはとても気持ちよかった。
足を踏み出すたびに「ギュッギュッ」となる音を楽しんだり
車が通った後のアイスバーンで滑って遊んだりしながら歩いた
雪合戦をしながら駄菓子屋に向かう、弟は息を切らせて俺を仕留めるための雪玉を
どこからか拾ってきたスーパーの袋にたくさん入れている。
俺はその量を見て「ぎょっ」となり
一目散に逃げ出した。
後ろから
「兄ちゃーん！兄ちゃーん！」

と声が聞こえたが、あれほどの雪玉を当てられてたまるかと
俺は弟を待ちはしなかった。

程なくして、弟が駄菓子屋についた。
大量の雪玉はすっかり解けてしまっていて、大きな塊になっていた。
小学３年生の弟の体力的に考えて、相当重かったろう。
元々丸い弟の顔が真っ赤になって、それはそれで可愛らしかった。
もう捨てろと言ったが
この弟はどれほどこの兄に恨みがあるのか
けして大きな雪玉を捨てようとはしなかった。

お目当てのビックリマンシールを３個買った。
残り４１０円、これは貯金するつもりだった。
新しいビックリマンシールのシリーズが出たら誰よりも最初に買うのだ。
弟は５円チョコを３個かった。
弟も残りは貯金するつもりだった。
俺は早くビックリマンの袋を開けて、中身を確認したかったがぐっと我慢した。
弟も５円チョコを大事にポケットにしまいこんだ。
あいかわらず大きな雪の塊を持って。

行きに比べて、帰り道は長く遠かった
さっきまでチラチラという風な雪模様だったのに
段々と大雪といえるほどになってきた。
それにこんなときに限って学校で聞いた
「雪女」の話まで思い出して、勝手な妄想にとりつかれてしまった。
あっという間に遠くが見えなくなった。

雪女が出てきたらどうしよう

とにかく恐ろしくなって弟の手をギュッと握った。
5分程歩くと、やっと俺達のアパートが見えてきた。
路肩には見慣れた車が止まっていた。
見慣れた車の助手席には、親父を待ってるおばさんが遠くからでも見えた。
車の横を通り様にチラッとオバサンをみた。
お袋とはまったく違う、茶色でパサついて大きくウェーブした髪派手な化粧で隠したシワ
お袋の方が綺麗なのに。

玄関に近づく前にお袋の声が聞こえてきた。
半開きになった玄関のドアから親父の足が見えた。
「いらないから帰って！」
「お前にじゃない！子供に渡してくれ！」
「そんな事される筋合いはないよ！帰りなさい！」
やさしいお袋が、人にこんなに怒っているのを見るのは初めてだった。
俺も弟もなんだか怖くて、物陰に隠れた。

親父は俺達のお年玉を渡しにきていた。
親父からすれば当然の事だったんだろう。
お袋はそれを断固として拒否していた。
養育費さえ払わない親父から、金を受け取るわけにはいかなかった。
二人とも興奮してきて、親父の声がどんどん大きくなっていった。
声になるとも思えないような親父の怒声は、お袋を黙らせた。
弟が大きな雪の塊を持って走っていった。
俺が、あっと思ったときには弟は半開きの玄関めがけて雪の塊を投げつけた。
それは惜しくもドアに当たってバーンとなった。

「なんでそんなことするんだー！」
と叫んだ弟の声と、それ以上言葉が出てこない子供の幼稚さが
親父の熱を冷めさせた。

遅れて俺が言った「親父は帰れ！」のセリフが
親父の親父たる理由の全てを親父から奪い去った。
親父は何も言わず、俺と弟の頭をすれ違い様に優しく撫でていった。

家に入るとお袋はガックリうなだれていた。
そして疲れていた。
俺と弟は買ってきたお菓子をポケットからだして
お袋に渡した。

俺のビックリマンと弟の5円チョコ

お袋は涙をぐっと堪えてお菓子を食べていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0448d/

絆の肖像

2010年10月9日18時36分発行